

平成29年度 学校総合体育大会 兼 全国高校総体サッカー大会 埼玉県予選 大会総評
「昌平高校 2連覇達成 ・ 浦和西高校 30年ぶり全国高校総体出場」

報告者：高体連技術委員 越ヶ谷高校 野木 悟志

平成29年度学校総合体育大会兼全国高校総体サッカー大会埼玉県予選が6月10日から6月25日の期間に開催された。本大会は、U18埼玉県リーグS1・S2に所属している25校（Bチームの5チームは除く）と関東大会埼玉県予選でベスト8の成績を残した慶應志木高校、そして各支部の予選を勝ち上がってきた26校の計52校によるトーナメント方式で実施された。優勝は2年連続で昌平高校、準優勝に浦和西高校、3位に浦和学院高校と西武台高校という結果となった。

優勝した昌平は、個の戦術理解度とスキルが高く、1試合を通じて攻守において主導権を握った戦い方ができる完成度の高いチームであった。3回戦の初戦から決勝までの全4試合中、準々決勝と決勝の2試合で先取点を奪われる試合展開であったが、慌てることなく自分たちのポゼッションサッカーを貫き通し逆転勝利を収めた。今大会の直前に行われた関東大会での初優勝を飾った経験が選手に自信と落ち着きを与えていたことが窺えた逆転勝利であった。今大会では4試合で16得点と攻撃陣の活躍が目立った結果となった。相手チームから攻撃を研究・警戒されている中でのこの得点力は見事であった。攻撃は、CBとボランチでパスの出し入れを丁寧に行いながらビルドアップし、横パスで相手のギャップを上手く作り出して効果的な縦パスを前線の選手に入れる。その瞬間に攻撃のスイッチが入り一気にスピードアップして相手ゴールに迫り得点を奪った。また、両SHが中央にポジションへ動くことによって中盤を厚くし、中央から人数をかけた厚みのある攻撃が展開されたり、両SHが中央に動いたことによってできたスペースを両SBが積極的な攻撃参加でサイド攻撃を仕掛けたりしてゴールを演出するなど多彩な攻撃パターンと得点シーンを見ることができた。その攻撃の中心がダブルボランチ⑦山下と⑬原田、FW⑨佐相である。⑦山下と⑬原田はボールの受け方が上手く、良い位置にボールをコントロールできるため常に複数の選択肢を持ってプレーできる選手である。両選手ともパスで攻撃のリズムを作るだけでなく、チャンス時にはゴール付近まで駆け上がり、得点機を演出したり自らも得点を奪ったりすることでチームの勝利に貢献した。⑨佐相は4試合で6得点を挙げ、得点感覚の高さを存分に発揮しエースとして大活躍した。決勝ではハットトリックを達成し、優勝の立役者となった。決勝での相手を背負った状態でパスを受け、体の強さを活かして素早い反転から奪った得点は非常にレベルの高いものがあつた。守備については、昨年からレギュラーとして出場しているGK①緑川、両CB④石井と⑥関根を中心にバランスとポジショニングの良い守備で相手に隙を与えずに安定感があつた。前線から積極的にプレスをかけ、相手のパスコースを限定させてボールを奪うなどチームとしてボールの奪い所がしっかり共有できており、良い守備から良い攻撃につながるシーンが多く見られた。また、個の守備意識とボール奪取能力が高く、攻撃から守備への切り替えも素早いいため、高い位置でボールを奪い返し二次攻撃につなげる

こともできていた。まさに「攻守一体」となったサッカーが高いレベルでできていることが窺えた。昌平は県新人大会、関東大会県予選、そして今大会も優勝を飾り、県内3冠を達成した。安定した結果を残し続けているのも「攻守一体」となったサッカーができていることが一要因であろう。

準優勝の浦和西は、3回戦から3試合連続で1-0で勝利し決勝に駒を進めた堅守が特徴的なチームであった。準々決勝の浦和東戦と準決勝の西武台戦では、ともに相手チームに主導権を握られながらの苦しい試合展開であったが、少ないチャンスを確実にものにし、ピンチの場面ではGK①斉藤を中心に体を張ってゴールを死守するなど勝負強く勝ち進んできた。決勝の昌平戦では、先取点を奪い浦和西らしく献身的な守備で昌平のパスサッカーに対し粘り強く戦ったが、運動量が落ち始めた後半半ば以降にボールホルダーへのプレスがかかなくなり、追加点を奪われ1-4と敗れた。攻撃は、自陣ではリスクを負わずに前線の選手へシンプルにロングボールを配給し、前線の選手が収めてタメを作ったり、中盤の選手がセカンドボールを拾ったりして素早く両SHに展開しサイドから攻撃を仕掛けていた。相手陣地内ではショートパスをテンポ良く繋ぎコンビネーションプレーで相手ゴールに迫ったり、ドリブルやスピードなど個の特徴を活かしたりしながらチャンスを作っていた。エリア(自陣・相手陣地)によって攻撃のプレーの選択がはっきりしており、選手もよく理解してプレーができていた。攻撃の中心として活躍を見せたのがボランチ⑭加藤とFW⑩遠藤であった。⑭加藤は高い技術と豊富な運動量で攻守においてハードワークすることができ、決勝では貴重な先取点を奪った。⑩遠藤は相手選手の間ポジションで受けることが上手く、豊富なアイディアと高い技術で攻撃にバリエーションを増やし起点となっていた。その他の選手でも準決勝で活躍したFW⑱高橋、決勝にスタメン出場したFW⑨森の両選手は高さがありながらも足元の技術もしっかりしており、高いポテンシャルを感じさせた選手であった。また、全体的に身長の高い選手が多く、セットプレーは迫力があつた。守備においては、決勝こそ4失点を喫したが、コンパクトなラインを設定しCBを中心によくラインが統率されていた。DFラインには高さのある選手が多く、空中戦ではどのチームにも負けていなかった。また、リスクマネジメントもしっかりできており、同数または数的優位な状況で守備ができていることが多かったため、失点が少なかった。今後は、1試合を通して自分たちのサッカーができる運動量を身につけ、より高い位置でボールを奪える機会が増えてくると、さらに相手チームに脅威を与えるチームになるであろう。

3位の浦和学院は、S2リーグにおいて7勝0敗(6月現在)で首位に立つチームであり、その好調さや勢いが今大会での戦いぶりにも存分に出ていた。特に準々決勝の武南戦においては、後半途中で退場者が出て数的不利の苦しい試合であったが、チーム一丸となって戦いぬきPK戦まで及んだ接戦をものにしたことからチームの勢いや強さを感じた。準決勝の昌平戦では、ボランチを経由した素早いサイドチェンジでSBにパスを送り、そこからアーリークロスでシュートまでいく良い場面も作れていたが、昌平の素早いプレスに苦しみ、本来のボランチを軸にパスを繋ぐサッカーがなかなか展開できなかった。守備は帰陣を素早

くし、人数とバランスを整えた高い守備意識が見られたが、1stDFの守備の決定が遅れ、DFラインが下がってしまい、空いた中盤のスペースを相手選手に使われ失点を重ねてしまった。今大会は準決勝敗退となってしまったが、17年ぶりに4強に進出し、優勝した昌平と準決勝という緊張感のある場で戦えたことは今後のチームの飛躍と成長につながるであろう。

同じく3位の西武台は、全員が攻守においてハードワークし、ピッチを広く使ったスピーディーなサイド攻撃と全体をコンパクトに保った組織的な守備が特徴的なチームであった。準々決勝では、県新人大会準決勝で敗れた正智深谷との対戦となったが、西武台の特徴であるスピーディーなサイド攻撃から決勝点を奪い2-1と逆転勝ちを収め、見事にリベンジを果たした結果となった。準決勝の浦和西戦では、奪ったボールを素早くSHにあて、SHが1対1の場面で果敢に仕掛けたり、SBが積極的なオーバーラップで2対1の数的優位な状況を作り出したりしてサイドを攻略し決定機を作ったが、シュートミスや浦和西のGKを中心とする守備陣に阻まれ、ゴールを奪うことができなかった。守備は浦和西のシュートを4本に抑えたが、PKによる失点を喫し0-1で惜しくも敗れた。シュート数やボール支配率では西武台が上回っており、どちらに軍配が上がってもおかしくない好ゲームであった。今後、シュート精度やクロスの質がさらに高まっていけば、埼玉県でタイトルをとれるチームに仕上がってくるであろう。

大会全般を振り返ると、丁寧にビルドアップしてパスを主体に攻撃を仕掛けるチーム、前線の選手の高さやスピードを活かすためにシンプルにロングボールを前線へ配給して攻撃を仕掛けるチーム、サイド攻撃を軸に攻撃を仕掛けるチームなど様々な攻撃スタイルのチームが見られた。そして、それぞれのチームの攻撃スタイルから素晴らしい得点シーンを多く見ることができた。しかし、決定機をシュートミスで決めきれないシーンも多くあり、「決定力」は多くのチームで課題であった。特に今大会は、ペースを掴んで試合を優位に進め、決定機とシュート数では相手チームより上回っていたが、得点を奪えずに敗退していったチームが多かったように感じた。記憶に新しい昨年度の全国高校選手権大会決勝も同じような傾向が見られた。結果は、青森山田が5-0で前橋育英を破っての初優勝を飾ったが、シュート数では前橋育英の方が上回っており、決定機も決して少なくはなかった試合内容であった。もし、前橋育英が決定機を決めていれば違った内容と結果になったかもしれない。逆に言うと、青森山田は決定機を確実に決める力があり、優勝するに相応しいチームであったと言える。今後、「決定力」を高めるためにシュート技術を磨いていくことはもちろんのこと、シュートに至るまでのプロセスも工夫と改善をしていく必要がある。例えば、シュートを打つ前のボールコントロール、ゴール前での相手選手を外すオフの動き、クロスボールの質やラストパスの精度などを高めていくが「決定力」を高めることにつながっていく。全国につながる大会(県予選)や全国大会においては、一発勝負のトーナメント方式で行われるため、「決定力」の差が試合結果に大きく影響してくる。埼玉でタイトルを獲得し、全国の頂点を取るためにも「決定力」を高めていくことは必要不可欠であると言える。守備については、上位に進出したチームは守備の約束事や戦術が徹底されており、攻撃から守備への切り替えが素早くで

きていた。各チームによってボールを奪いたいエリアやプレスをかけ始める位置には違いが見られたが、意図的かつ組織的にボールを奪おうとする意識はどのチームにも共通して見ることができた。前線の2トップでパスコースを限定し、SBにボールが入った瞬間にプレスをかけ高い位置でボールを奪ったり、SBから配給される縦パスに対し前後で挟んで奪ったりと良いボールの奪い方をしている場面を多く見ることができた。組織的な守備力が高まってきている一方で個の守備能力には課題が残る。人数やバランスが整った状態ではさほど目立つ場面はなかったが、カウンター攻撃を受ける場面など数的同数や数的不利の状況においての個の守備の対応には改善が必要であると感じた。前を向いて仕掛けてくる攻撃選手との1対1の場面で安易にチャレンジして抜かれてしまい、ピンチを招いている場面が多く見受けられた。体を入れて完全にボールを奪い取れそうな場面にも関わらず、簡単に足でチャレンジにいきタッチラインにボールを蹴り出した結果、相手のロングスローから失点を喫したチームもあった。また、今大会は直接FKやPKからの失点が多くあったことからゴール付近で守備者が不用意なファウルをしている状況が窺えた。日々のトレーニングの中で相手選手との間合いを詰め身体を使ってボールを奪い切ることを徹底させていき、クリーンかつハードに1対1を戦える選手や個のボール奪取能力の高い選手をより多く育成していくことが重要である。チームとしての組織的な守備をさらに強固なものにしていくためにも、個の守備能力を高めていくことが求められる。

今回優勝した昌平、準優勝した浦和西は7月28日から宮城県で開催される全国高等学校総合体育大会に出場する。両チームともに県予選での成果と課題を整理して本大会に臨み、昨年度の昌平の全国高校総体第3位を上回る好成績を残すことを期待して総評とする。